平成２７年度
アウトリーチ事業 調査研究　評価等報告書

公益財団法人 相模原市民文化財団

2015 年度「学校訪問授業」 ・・・・1

平成２７年度桜美林大学アートマネジメント人材養成推進事業
実践アウトリーチの現場を体験してみよう　演劇編 ・・・・3

かんじる学校２０１５冬　こどものためのえんげきワークショップ
～オノマトペえんげきであそぼう！～ ・・・・5

「えーとね、あーとね」
～アートで育むコミュニケーション～カラダであそ部 ・・・・7

シニアのための俳優講座　構成劇「オイディプス」 ・・・・9

2015 年度「学校訪問事業」

>> 概要

２００８年より継続して実施している事業。相模原市に在住、在勤のプロの音楽家集団、相模原音楽家連盟に加盟する音楽家が市内小学校に出向き、音楽の特別授業を実施するもの。演奏するだけではなく、出演者自ら楽器の紹介をし、子ども達が楽器に触れる機会等も提供する。なお、実施希望校は公募とし、例年１０校程度実施している。応募数が多数であるため、応募校のうち未実施の小学校を優先して実施校を決定している。

>> 目的

子どもたちが普段ふれることの少ない、プロの音楽家による生演奏の音楽を間近で提供することで、音楽を通じた自己表現やコミュニケーションの楽しさを感じてもらう。そしてとかく敷居が高いといわれるクラシック音楽への興味を喚起することをねらいとする。

>> 対象者　市内小学校の４年生

>> 出　演　相模原音楽家連盟

>> 実施期間　9 月～ 11 月

>>2015 年度実施校及び編成

弦楽５重奏　…　青葉小学校（58 人）、緑台小学校（59 人）
金管５重奏　…　九沢小学校（103 人）、津久井中央小学校（47 人）
木管５重奏　…　新磯小学校（147 人）
チェンバロ　…　大野北小学校（117 人）
声楽＋ピアノ３重奏　…　大沼小学校（96 人）、湘南小学校（30 人）

※生徒数が少ない津久井中央小学校及び湘南小学校は、複数の学年を対象に実施
※実施校のうち、評価者の訪問校は、青葉小学校、大野北小学校、新磯小学校、湘南小学校

>> 内部評価

＜事業目的に対する評価＞

約１０校（※）の実施枠に対し、３５校からの応募があった。

クラス単位で授業を行い、子ども達に間近でプロの演奏家による生演奏を提供した。

また、生演奏だけではなくそれぞれの楽器の紹介や楽器体験、子ども達が練習している合唱曲の共演等を行い、音楽を通した楽しさを様々な側面から提供することができた。そして、敷居が高いといわれるクラシック音楽への興味を喚起するという点においても、出演者の工夫などにより、その目的を果たすことができたと思われる。

ただし、進行や演奏以外の内容において、編成によってはよりきめ細かな確認をリハーサル等で行った方が良いと感じられるものもあった。例えば、進行においては時間通りに終了することが難しく、その結果休憩時間を充分に取ることができないまま次の授業となってしまったこと、演奏以外の内容においては、楽器説明の方法や時間のかけ方にバラつきがあったことである。

これらの課題は財団内でも共有し、リハーサル時には演奏以外の部分も確認するなど、次年度はより良い授業内容にしていく。

＜広報・営業・販売に関する評価＞

本事業について記者クラブにパブリシティ活動を実施する等、記事掲載を通した財団としての事業実施のアピールを行った。その結果、朝日新聞、タウンニュース、武相新聞に情報が掲載された。なお、取材の写真撮影を行う際に、授業の妨げになってしまうことがあった。来年度以降は取材申し込みを受けた際に、取材時の諸注意を伝える。

＜総合評価＞

内部評価が高く、内容面の独自性においても評価することができる。今回出てきた課題を克服する工夫をし、また、財源の確保に努めながら基幹事業として継続していくこと。

※約 10 校としているのは、実施にあたって学校数ではなく実施事業数 20 事業を目途にしているため（例：1 学校 2 クラスであれば、10 校で 20 授業となる）。
2015 年度は、2 クラス以上の学校も含まれたため、8 校の実施となった。

>> 委託者評価

本事業では、広く児童に楽器演奏の鑑賞機会を設けるという目的は達成されていた。その上で、より楽器、楽曲の理解を深める体験とするために、小学校、演奏者、財団の三者の役割を明確にする必要がある。

受け入れ小学校は、自校のニーズをより積極的に演奏者へ伝える必要があると思われた。演奏、解説、楽器に触れる機会など、いずれの要素に重点を置くプログラム構成とするのか、自校の児童の特長を踏まえ具体的な希望を出してもよいのではないか。

演奏者においては、今回の視察で個々人の差が最も大きかったのがプレゼンテーション力である。担当楽器の一般的な認知度に鑑みて、見る、聴く、解説のどの要素が音楽体験として重要なのかの整理、把握が不足している場合が見受けられた。テレビ番組の使用楽曲などの有名作品を必ずしも扱う必要はないが、マイナーな作曲家、作品を扱う際には音楽史上の意義を解説すべきだろう。時間が限られるためクイズなど相互交流の機会は必須でないと私は考えるが、児童の関心と演奏者の意図のマッチングを測る上で質疑応答は試みとして興味深いのではないか。

財団においては、上記のポイントを事前に両者の間に適切に伝達することが重要である。また、演奏者が他校の授業を見学する機会があったが、これはアイデア共有として有効な手段だと思われる。

平成２７年度桜美林大学アートマネジメント人材養成推進事業
実践アウトリーチの現場を体験してみよう　演劇編

>> 概要

桜美林大学との共催事業。主に公共ホール職員等を参加者の対象とする。アウトリーチ事業実施のノウハウ等の提供及び情報交換を通し、アウトリーチ事業に携わる人材育成を目的として行った。

>> 講　師　田上 豊（劇団「田上パル」主宰・演出家）

>> 実施日時　2015 年 10 月 27 日（火）18：30 ～ 21：30

>> 会　場　相模女子大学グリーンホール・リハーサル室

>> 参加対象者　公共ホール等職員及び文化芸術に携わる学生等

>> 参加人数　19 名

>> 内部評価

＜事業に関する評価＞

桜美林大学との共催事業として昨年度に引き続き実施した。今回はジャンルを演劇として、講師が小学生を対象として行っているアウトリーチをモデルに、講座のデモンストレーション形式で体験し、解説を受けた。最後はアウトリーチについての意見交換を行う内容となった。

＜広報について＞

情報紙 Move やホームページ等で広報協力を重点的に行ったが反応は希薄であったため、参加者を募集するための広報手段を模索する必要があると考える。

＜講座について＞

講師は多くの会場でアウトリーチの講座を行っているため、現場ならではの体験談が好評であり、アウトリーチ事業のレベルアップに繋がる内容であった。しかし、参加者の多くが桜美林大学の学生であったため、結果的に未経験者向けの内容となってしまった。今後財団としてこのような事業を取り扱う場合は、市外近隣施設の事業企画者を対象とするなどの、ターゲットを明確にした講座内容とすることが望ましいと感じた。

また、アンケートの回収率については、１９分の７と半数以下であったため、今後回収率の向上を図るとともに、求められるニーズを把握し、事業を企画する検討材料としていく。

＜総合評価＞

調査研究事業を近隣大学と連携し、実施したことは評価できる。今後同様の事業を実施する場合には、平成２７年度より開始したアウトリーチ事業に対する第三者からの評価等も踏まえ、今回の課題を克服する工夫を先方と検討すること。

>> 委託者評価

本事業は、田上豊氏の演劇ワークショップ体験としては十分に機能していたと言えるが、アウトリーチ事業の体験講座としては不十分な点が残った。大きな問題は、アウトリーチ事業の企画者やマネージャーではなく、ファシリテーター志望の参加者を想定してプログラムが組まれていた点である。特に質疑応答、ディスカッションの時間では学校現場で有効な内容構成や進行上のテクニックに話題が終始してしまい、田上氏が企画者側に具体的にどのような役割や能力を求めているのかが語られなかった。この点と関連して、本事業の前半にあたるワークショップ体験では、演劇未経験者へのワークショップ体験を第一義に置くのではなく、むしろ個々のワークの持つ意義と目的の細かい解説に重点を置くべきである。ワークショップの内容を言語化しファシリテーターと共有することで、企画者がアウトリーチ先との橋渡し役を誤解や齟齬なく果たせるようになることが、本事業の一番の目的であるべきである。

かんじる学校 2015 冬　こどものためのえんげきワークショップ
～オノマトペえんげきであそぼう！～

>> 概要

「かんじる学校」というシリーズ名で２０１１年度から継続して実施している。舞台芸術分野を中心に小学生を対象としたワークショップを行う。今回は演劇をテーマとし、芸術に身近に触れ、表現する喜びを体験する場を提供した。なお、相模女子大学との共催事業として実施した。

>> 講　師	柏木 陽（特定非営利活動法人演劇百貨店代表）
>> 実施日時	2015 年 12 月 20 日（日）10：00 ～ 15：30
>> 会　場	相模女子大学・茜館
>> 参加対象者	小学生（１年生～６年生）
>> 定　員	30 名
>> 参加者数	30 名（応募者数・45 名）
>> 参加費	1,000 円

>> 内部評価

＜事業内容に関する評価＞

参加者からは「はじめて会った人と友達になって楽しかった」「演劇がふしぎで楽しかった」「説明が分かり易かった」というコメントが、保護者からは「泣き虫の娘がとてもいきいきと瞳を輝かせていた様子に感動いたしました」というコメントがアンケートに寄せられた。また、講座内容、参加費、会場の利便性について満足度が高い結果であった。ただし、日程について「１２月の早い時期が良い」「土曜日が良い」等の意見があった。

＜事業の目的に関する評価＞

参加者からは「みんなと協力できて楽しかった」「オノマトペはすごくおもしろいのがわかりました」というコメントが、保護者からは「感性がみがかれる、良い体験だと思いました」「子どもたちがいきいきと発表していておどろきました。楽しくお友だちと何かを表現するいい機会になったと思います」というコメントがアンケートに寄せられるなど、ワークショップを通し表現する喜びやコミュニケーションを図るといった目的を達成したと思われる。

＜総合評価＞

定員以上の応募があり、参加者の満足度も高い。今後も本事業は本部の定例事業として継続すること。

>> 委託者評価

本事業は、導入のエクササイズからグループワークによる作品製作、発表までを半日で達成する、密度の濃い演劇ワークショップだった。特に、初対面の児童が多い参加者構成ながら、児童間の協調が短時間で生まれており、作品製作では講師らの補助を必要としないグループもあった。

財団職員が補助に入る場面が散見されたが、上記の状況に鑑みるに、職員と児童の接触時間はより少なくて良いだろう。安全上監督が必要な場合はあるが、原則としては講師、アシスタントがそれぞれのグループの自律性を確認し、指導方針を統一することが望ましい。

コミュニティを問わず広く参加者を募る上で、今後注目すべきは企画の継続性だろう。学校や地域以外の交友を持つことが難しい年齢だからこそ、中長期、または定期的な企画への展開は、児童の新たな人間関係構築の一助となる。

「えーとね、あーとね」～アートで育むコミュニケーション～

カラダであそ部

>> 概要

ワークショップを通したコミュニケーションの場を提供することを目的とし、０歳児以上の子どもと母親の部、６０歳以上のシニアの部の２部構成でダンスのワークショップを実施した。また、別日に両者が一緒にワークショップを体験する機会も提供した。なお、青山学院大学との共催事業として実施した。

>> 講　師	新井英夫（ダンサー）
>> 実施日時	2016 年 3 月 9 日（水）10：00 ～ 11：00［ばぶば部］／ 14：00 ～ 15：00［じょう部］ 3 月 27 日（日）10：00 ～ 11：30［ぜん部］※合同ワークショップ名
>> 会　場	杜のホールはしもと・多目的室
>> 参加対象者	［ばぶば部］…0 才～の子どもとその母親／［じょう部］…60 歳以上
>> 定　員	［ばぶば部］…20 組 40 名／［じょう部］…20 名
>> 参加者数	［ばぶば部］…19 組 41 名（応募者数・31 組 66 名）／［じょう部］…14 名
>> 参加費	1,000 円

>> 内部評価

＜事業内容に関する評価＞

［ばぶば部］参加者からは「人見知りの子どもだったので［ぜん部］は楽しみにくい？とも思いましたが、とっても楽しんでいるようでした」「２日間楽しく参加できました。自由な雰囲気で赤ちゃんでも安心して参加できました」というコメントが、［じょう部］参加者からは「自然にあせだくで…体を動かしていました」というコメントがアンケートに寄せられた。また、講座内容、参加費、会場の利便性について満足度が高い結果であった。しかし［じょう部］の定員を下回り、広報が届かなかったと思われる。

＜事業の目的に関する評価＞

参加者からは「またの機会がありましたら是非参加したい」というコメントがアンケートに寄せられるなど、ワークショップを通し自然に体を動かす喜びやコミュニケーションを図るといった目的を達成したと思われる。

＜総合評価＞

シニア向けのワークショップについては、参加者数に課題が残ったと言える。事業の目的やねらいを整理し、分かり易い広報を行う必要があったのではないか。同様の事業を実施する際には、この課題をクリアするよう工夫すること。なお、市民が身近に芸術に触れる機会の提供としてアウトリーチ事業は継続して実施を検討すること。

>> 委託者評価

本事業は、乳幼児およびシニア世代を対象とする、ダンスを通じて体を動かすことへの興味を導く体験型のワークショップである。ばぶば部では、言葉を用いないコミュニケーションを通じて『はらぺこあおむし』など参加者に親しみのある物語を様々な仕掛けで展開し、公園や保育所など参加者の日常とは異なる遊戯の空間を作りだしていた。じょう部では、ゲームと解説を交えながら、ダンスに親しみのない参加者へ即興パフォーマンスへの導入を行い、表現への楽しみを感じさせる時間となった。ただし、両プログラムとも１時間構成であり、特にじょう部では参加者の集中が高まる頃に終了となるため、時間不足の印象が強い。またばぶば部では、年齢によって参加意識に大きく差があり、むしろ同伴する母親の関心を惹きつけるアプローチが強く求められた。私は合同のワークショップを未見であるが、発表会形式とするのであれば、両世代共通のモチーフや問題意識、またより充実したワークショップの時間を確保することが必要だろう。

シニアのための俳優講座　構成劇「オイディプス」

>> 概要

参加対象者を６０歳以上の女性とした演劇のワークショップ。前期６日間、後期１２日間実施した。本ワークショップは２０１３年から開始し、３期目を迎える平成２７年度は、最終日の発表公演もこれまでの集大成として規模を拡大して開催した。

>> 講　師　倉品淳子
（劇団山の手事情社所属俳優、演出家、えずこホール仙南芸術文化センター芸術監督、桜美林大学講師）

>> 実施日　前期…9/17（木）、9/24（木）、10/1（木）、10/8（木）、10/16（金）、10/17（土）
後期…2/19（金）、2/25（木）、3/3（木）、3/8（火）、3/10（木）、3/15（火）、3/17（木）、3/19（土）、3/22（火）、3/24（木）、3/25（金）、3/26（土）
※3/26（土）は公開発表会（整理券配布）
※上記日程のうち評価者の視察日は、2/25（木）、3/3（木）、8（火）、22（火）

>> 会　場　おださがプラザ・多目的ルーム

>> 参加対象者　60 歳以上の女性

>> 定　員　20 名

>> 参加者数　20 名

>> 参加費　36,000 円

>> 内部評価

＜事業内容に関する評価＞

参加者からは「生きがいを感じた」「ギリシャ悲劇に触れられる経験ができてよかった」「シニアだけというくくりがよかった」また、公開発表会の観劇者からは「還暦を過ぎた女性たちのパワフルさに感動した」というコメントがアンケートに寄せられた。また、講座内容、参加費、会場の利便性について満足度が高かった。

＜事業の目的に関する評価＞

参加者からは「年齢を重ねるにつれ、記憶力など失ってゆくものも多いが、逆に感情の豊かさや思考力の深さなど得ているものも多いことに気づいた」「シニアぴったりの講座で、私自身も心身ともに活性化した」また、観劇者からは「エネルギーを感じました」「母親の日常と非日常が交錯する構成は面白かった」というコメントがアンケートに寄せられ、芸術に関する理解を深め、地域社会に貢献するという目的を達成したと思われる。

＜総合評価＞

ワークショップ事業としては参加費が高額であったが、定員を上回る応募となったこと、外部評価及び内部評価が共に高く、評価することができる。平成 28 年度以降については、過去 3 年間を振り返り、課題について整理し、継続する際の検討材料とすること。

>> 委託者評価

本事業は、６０歳以上の女性を対象とした演劇ワークショップおよび成果発表公演である。講師の倉品淳子氏は自身の所属劇団である山の手事情社のメソッドを応用しながら、シニア世代の女性の経験を『オイディプス』の物語に仮託し作品を製作した。結果、古典の上演でありながら参加者にとって身近で現代的なテーマが表現された作品となった。稽古では、「秘密」というキーワードをもとに、前半では個別の参加者の世代やジェンダーに基づく体験を探る即興を行った。後半では即興から生まれたシーンを『オイディプス』と接続する作業に注力があった。古典の現代化としても、参加者間のフェミニズム的経験の共有としても、稽古、作品の構成は巧みである。本事業はすでに 3 年の蓄積があり、年度をまたいだ参加者間の繋がりも生まれている。一般参加型のワークショップとして重要な要素である継続性を保っている点は特筆に値する。指導者の変更があっても、同じコンセプトで今後も同様の企画が開催されることを期待する。

>> 委託者評価

伊藤 寧美（いとう なび）

1988 年、兵庫県生まれ。国際基督教大学卒。東京大学総合文化研究科博士課程在籍。

現代イギリス演劇を専門とし、特に 1990 年代以降の戯曲作品を研究対象とする。また、日本の現代演劇も研究領域とし、複数の劇評を発表している。

2013 年、2015 年に東京大学にて、兵庫県立児童館こどもの館で開催される演劇ワークショップ「こどもの館劇団」のドキュメンタリー映画、『時は廻りて』の上映会を実施した。自身も、中学二年生から高校二年生までこのワークショップに参加していた。

最近の劇評に、「500 円の価値（集団：歩行訓練『不変の価値』）」（ワンダーランド、2013 年 2 月）「生き残ってしまった者たちへの鎮魂歌――被災地の高校演劇、『もしイタ』」（シアターアーツ、2015 年 2 月）「絶望と共に在ること（アンジェリカ・リデル『地上に広がる大空（ウェンディ・シンドローム）』）」（シアターアーツ、2016 年 3 月）など。

Copyright © 2016 Sagamihara Culture Foundation. All rights reserved.